



# 魔法の言葉



遥佳

「きーちゃんは、おおきくなったらぼくのおよめさんになってくれる？」

「しかたないわね。わたしがめんどろみてあげるわ」

仕方がないなんて嘘だ。本当は、嬉しくて仕方がなかった。

それは、遠い日の約束。幼心の戯言。

あの日の指きりは、まだ有効ですか。

+ + +

ましろ  
真白高校には双子の姉妹がいました。

しっかり者の姉、<sup>ほんじょうきさき</sup>本城紀咲 と、おっとりとした、妹の本城<sup>こゆき</sup>小雪。双子とは言っても、二卵性双生児なので、普通の姉妹程度にしか似ていません。

それから、彼女達の幼馴染みの<sup>ががみきょうへい</sup>賀上鏡平。

三人はとても仲がよく、いつでも一緒でした。

+ + +

玄関で靴を履いて、紀咲は後ろを振り返った。

「もう、まだなの？ 遅刻するわよ、小雪！」

癖のない黒髪は、肩甲骨の辺りまで。前髪は眉のラインでぱっきりと切られている。つりがちな双眸はそれだけで威圧感を感じさせるが、表情よりも怒っていない事がわかるのは数人だけだ。

階段をどたばたと駆け下りる音と共に、情けない声が響く。

「ごめん。待ってえ、紀咲」

ゆるく癖のあるつややかな黒髪は、肩に触れるか触れないかといった辺りで渦巻いている。黒目がちな双眸はうるみ、ふっくらとした唇は泣き出しそうに歪んでいる。

「もー、スカーフちゃんと結べてないじゃない」

紀咲はへたくそに結ばれた小雪のスカーフを、手早く綺麗に結んだ。小雪が靴を履いている間に、紀咲はドアを開けた。

今朝の空気は澄んでいて冷たくて気持ちがいい。門を出てすぐのところに幼馴染みの姿を見つけ、紀咲は微笑んだ。

「おはよ、鏡平」

「おはよう、紀咲ちゃん、小雪ちゃん」

「おはよ一、<sup>きょう</sup>鏡くん」

ちゃんと靴を履いた小雪がひよこりと顔を出した。紀咲が鍵を閉め、並んで歩きだす。

これが、彼女たちの日常だった。

クラスの違う三人は、中庭でそろってお昼ご飯を食べるのが日課になっていた。

「はい、お弁当」

「ありがとう、紀咲ちゃん」

包みを受け取り、鏡平はにこりと笑った。紀咲はスカートを押さえて、広げたシートの上に座った。

紀咲、小雪の親と鏡平の親は共に忙しいため、子ども達が家事をする事が多い。そんな中でも、料理は紀咲の担当で、三人分の弁当は毎日彼女が作っていた。

「それにしても、二人して同じアレルギー持ちなんて。とんだ偶然があったものね」

「まあ、仕方ないよ。それに、紀咲ちゃんの手料理が食べられるから、俺は幸せだよ」

へらりと笑った鏡平に、紀咲はやや頬を赤らめて顔をそらした。

小雪と鏡平は共に小麦アレルギーを持っている。そのため、紀咲の作る料理は、全て二人のために小麦粉を使わずに、米粉なんかを代用して作られている。小学生の頃から小麦粉を使わない料理を研究するうちに、今では大抵の料理が作れるようになっていた。そんなしっかり者の紀咲は、抜けたところのある二人には丁度良かった。

弁当を食べ終えた小雪は、約束があると言って先に校舎の方に戻った。

小雪がほったらかしにして行った弁当箱を、紀咲は丁寧に片付ける。鏡平はその向かい側で、自分の分の弁当箱を片付けていた。

昼食を食べた後は、予鈴が鳴るまでゆっくり過ごすのがいつもの事だが、ここ最近は二人で過ごすことが多かった。

「小雪ちゃんは、ホント人気者だよね」

「そうね。あの子、可愛いもの。性格もいいし。ちょっとおっちょこちょいなところはあるけど」

ドジですら、愛嬌に変えてしまう。それはもう才能といってもいいのではないだろうか。

紀咲にとって、小雪は自慢の妹だ。それでも、時々思うときはある。

紀咲はちらりと鏡平を見上げ、髪を耳に引っ掛けた。心を落ち着かせるために、ゆっくりと息を吸う。

「……ねえ、私と小雪、どっちが可愛いかな、なんて」

「小雪ちゃんだよ」

鏡平は、迷いなく答えた。

胸の奥の方に、何か突き刺さったような気がした。

「そ、そうよね。何訊いてるんだろう、私」

そう、解り切った事。双子なのに、小雪の方が人気者なのは、誰だって知っている。

「でもね——」

「おーい、本城！ 本城紀咲！」

続けようとした鏡平の言葉をさえぎるかのごとく、紀咲を呼ぶ声がした。声のした方を振り返って、鏡平はわずかに顔をしかめた。彼女を呼んだのは、紀咲と同じクラスの大野だった。

名前を呼ばれた紀咲は、ほっとしたように立ち上がった。

「ごめん、鏡平。私呼ばれたから行くね。お弁当箱よろしく」

「あ、うん。行ってらっしゃい」

癖のない黒髪が、折り目のきちんとついたスカートが、ひるがえる。

「何よ大野！ また何かやらかしたんじゃないでしょうね！」

半ば叫びながら駆けだした紀咲の背中を見送り、鏡平は小さく苦笑した。いつもの穏やかな表情を消し去り、目をずっと細める。

「ああ、上手くいかないなあ……」

私服に着替えた鏡平は、いつものように勝手に本城宅に上がりこんだ。

「いらっしゃい、鏡くん」

「あれ、紀咲ちゃんまだ帰ってないの？」

リビングには、ソファに座って雑誌を読んでいる小雪しかいない。部活動もしていないから、この時間なら大抵帰っているはずなのに。

「紀咲なら、遅くなるって。でも晩御飯には間に合うように帰ってくるって言ってたよ」

「そっか」

気落ちした様子の鏡平に、小雪はにやりと笑った。

「鏡くんは本当に紀咲が大好きだねえ」

小雪の言葉を否定も肯定もせずに、穏やかに微笑むと鏡平は向かいのソファに腰かけた。

「あれ、その髪留めどうしたの？」

「これね。似合ってるかな？」

「うん。可愛いと思うよ」

鏡平が褒めると、頬を手の平ではさんで、幸せそうに笑った。雪の結晶をモチーフにした髪留めは、小雪にとってもよく似合っていた。

「そうそう、聞いてよ鏡くん。紀咲にはまだ言ってないんだけどね」

小雪が身を乗り出してくる。彼女が幸せそうだと、こっちまで幸せに感じるから不思議だ。

「あのね——」

——遅くなっちゃったなあ。

半ば早足になりながら、紀咲は帰路を急いでいた。

十二月の頭のこの時期は、当然のように日が暮れるのが早い。六時をまわったところだが、すでに世界は暗く、街灯や店から漏れる光や、車のヘッドライト、それに色鮮やかなイルミネーションが道を照らしていた。

途中、書店に寄る。

棚の前をうろつき、紀咲は目的の本を見つけた。目的の本は、一番上の棚に並んでいた。背伸びをして、何とか届くかどうかという高さだ。

つま先で体重を支え、手を伸ばした。あと少しで棚に並ぶ目的の本に指先が届きそうだ。

——あ。

少し前に体重をかけすぎたらしい。バランスが崩れた。

「っ!!」

棚に手をつく前に腰に回された腕に引かれ、紀咲は数歩後方にたたらをふんだ。そのまま、ぽすっと抱き寄せられた。

「大丈夫、紀咲ちゃん？」

「だ、いじょうぶ」

聞きなれた声に、紀咲は顔を上げた。紀咲を抱えていたのは、私服姿の鏡平だった。

片腕で紀咲を支えたまま、鏡平は体を斜めにして本棚に手を伸ばすと、彼女が取ろうとしていた本を抜き出した。

「はい。これでいいの？」

「あ、ありがとう」

紀咲は本を受け取ると、恥ずかしいやらなんやらで、ぽっとうつむいた。声が震えそうになる。

「……あのね、もう、放しても大丈夫だから」

「え、ああ、そうだね」

今気づいたように頷いて、鏡平は紀咲を解放した。

「レジ、行ってくるわ」

「じゃあ、俺は外で待ってるよ」

さっきまで一人だった帰り道を、二人で歩く。さっきよりもペースはゆっくりめだ。

「帰ってくるのが遅いから、ちょっと気になってね。ちょうど、本屋さんに入っていき紀咲ちゃんを見つけたんだ」

どうしてここに、と聞くと、鏡平はそう答えた。

それだけで嬉しくて、紀咲は思わず頬が緩むのを隠すためにうつむいた。

「でも、こんな時間まで、何してたの？」

「来週からテストでしょ？ 大野に数学マジでやばいから教えてくれって頼まれたのよ。今度の期末で赤点取ったら進級出来ないかも、とか。まったく、普段からちゃんとやってればそんな事にはならないのに」

あいつはほんとに馬鹿だわ。と、紀咲は強く言った。

昼休みに呼び出された後、大野に押し倒されて、テストまで放課後に数学を教える事にしたのだ。

「でも教えてみると、案外のみ込みがいいのよね。ちゃんと授業を聞いてれば、もっと点数が取れたはずよ」

「それは、紀咲ちゃんが教えるの上手いからだよ」

「そうかしら」

うれしそうな口調。だが、鏡平の声は硬い。

「……でも、暗くなってから一人で帰るのはどうかと思うよ」

「大野は送るって言うてくれたけど、あいつ家反対方向だし、断ったの。って、大野の話なんてどうでもいいじゃない。それより、早く帰って晩御飯作らなきゃ。あ、その前にスーパー寄りたいたけど、鏡平一緒に来てくれない？」

紀咲に見上げられ、鏡平は相好を崩した。

「いいよ。——紀咲ちゃんの頼みなら、何だって」

ちょうど、二人の真横を救急車が通り過ぎた。白い車体が、赤い光を撒き散らしながら通り過ぎる。サイレンの音が、鏡平の言葉を掻き消した。

「ごめん、鏡平。今のサイレンで聞こえなかった。何て言ったの？」

「……ううん、なんでもないよ。早く行こう。小雪ちゃんがお腹を減らして待ってるよ」

「そうね」

歩きだした紀咲の半歩後ろをついて歩く。道路を眺め、鏡平はぐしゃりと髪をかきあげた。

「遅くなってごめん。すぐにご飯の用意するから」

買い物袋を置いて、エプロンをつけると、紀咲は要領よく夕飯の支度を始めた。

たんたんたん、と小気味いいリズムが響く。

リビングでは、鏡平と小雪が話している。いったい何を話しているんだろう。紀咲はそっと、リビングのほうに意識を向けた。小声で喋っているのか、ここからでは何を話しているのかはわからない。

小雪が頭に手をやった。見たことのない、髪留め。幸せそうな、小雪の笑顔。

——鏡平が、あげたの？

つきん、と胸の奥の方に奇妙な疼きを感じた。それは痛みにも似ていた。

キッチンで、鏡平が食器を洗っている。食べるだけでは悪いからと、いつからか鏡平が片づけを担当するようになっていた。

「……その髪留め、どうしたの？」

「これ？ もらったの。素敵でしょ？」

小雪は心の底から幸せそうに笑った。足りないものなんて、何一つないかのような笑顔。

「鏡くんも、可愛って褒めてくれたの」

「そう」

「それでね、今度の土曜日なんだけど、鏡くんと二人でお出かけしてくるね」

二人で。

「……そう。行ってらっしゃい」

心が、揺れる。紀咲は動揺を押し殺して笑顔を貼り付けた。

「ちゃんと、テスト勉強もするのよ」

「なあ、本城」

「無駄口叩かないの。テストまであと三日しかないのよ」

金曜日の、放課後の教室。紀咲と大野は机をつき合わせてテスト勉強をしていた。

つんけんした声にも動じず、大野は言葉を続けた。

「お前の妹、小雪だっけ。彼氏出来たらしいな」

——何それ。聞いてない。

紀咲は手にしていたシャーペンを無意識に強く握り締めた。そういえばここ数日、いつにも増して幸せそうだった気がする。でも。

「……それが、どうしたのよ」

動揺を押さえても、声が震えた。

鈍い大野でも、さすがに紀咲が不機嫌な事には気がついた。だが、引くには遅かった。

「い、いやさ。本城は彼氏欲しいとか、考えた事ないのかなって、思っただけで——」

「今そんな話関係ないでしょ！」

がたん、と倒れた椅子が大きな音を立てた。叫んだ紀咲に、大野は目を見開いた。

「……わ、わりい」

「……ううん、私もゴメン。ちょっと、疲れてるのかなあ」

紀咲は顔を両手で覆い、ははっ、と力なく笑った。

小雪と鏡平を見るたびに、不安になった。一緒にいても、はずれものにされているような気がして。二人が秘密を共用している事に、紀咲は気づいていた。そして、それが何なのかわからなくて、いらだっていた。

「……本城にとって、妹の小雪はコンプレックスなのかもしれねえけどさあ。もっと、自分に自信持ってもいいと思うぜ」

コンプレックスなんかには思っていない。そう言い返そうとしたのに、出来なかった。

影で、白雪姫の物語のようだと噂されている事は知っていた。妹の小雪は可愛いのに、姉の紀咲は……。そして最後に、必ずと言っていいほど、双子なのだという言葉がくつついてくる。

「……私は、小雪と鏡平が幸せになってくれたら、それでいいの。それが、私の幸せなの」

「何でそこに賀上の名前が出てくるんだよ」

返した大野の声には、苛立ちが混じっていた。

「俺は、お前が好きだよ。小雪じゃなくて、紀咲が」

「……ありがとう。大野」

不器用で、優しく、真っ直ぐな言葉。だから、紀咲はあえて気付かない振りをした。

「ごめん、今日は終わりにして。私がいなくても、ちゃんと勉強続けるのよ」

+ + +

土曜日が来た。紀咲は、昨夜から心がざわついて仕方がなかった。

「ねえ、これでいいかな？」

紀咲の前で、小雪はくるりとその場で回って見せた。

「小雪ったら、リボンちゃんと結べてないじゃない」

「え？ あ、ほんとだ」

自分の胸元を見下ろし、小雪は気の抜けた声をあげた。ケープを留めるリボンの輪が左右非対称だし、だらしなく垂れている。

「どんくさいわねえ。結んであげるから、こっちに来なさい」

「はい」

結びなおすために、一度リボンをほどく。小雪はくすぐったそうに首をすくめた。

このままこのリボンで絞めてしまえば――

よからぬ妄想に、ずっと血の気がひいた。リボンを握る手が小さく震える。嫌な汗があふれそうだ。

「どうかしたの、紀咲」

「何でもないわ。……ほら、出来たわよ」

左右の輪が同じ大きさになるように整え、手を放した。完璧。

「よく見たら、髪も寝癖がつきっぱなしじゃない」

「えー、うそお。もーやだあ」

「はい、じっとして」

くしを取り出し、髪を梳く。くせ毛だが、からむことなく柔らかい。手の中で、細い髪がすべる。

「まったく、せっかく可愛いんだから。勿体無いわ」

「紀咲だって、人気者じゃない」

「私は駄目よ。小雪みたいに可愛くないもの。それに、こんなキツイ性格だから」

そうだ、人気があるのは、いつも小雪の方で。

「でも、紀咲」

「はい、じっとする」

振り向こうとした小雪の頭を押さえた。

そういえば。昔読んだ御伽噺を思い出した。

白雪姫の物語でお妃様は、紐で、くしで、白雪姫を殺そうとする。毒を塗ったくしで。まるで今の瞬間のように。

――だめよ。違う。私は小雪を妬んだりなんてしてない！ 物語のお妃様とは違う！

「……ほら、これで綺麗になったわ」

「ありがとー」

ほわほわと笑う小雪に、毒気を抜かれたような気がした。

「行ってらっしゃい。転ばないように気をつけるのよ。それと、外食するときは食べ物にも気をつけてね」

「もう、わかってるってばあ。じゃあ、行ってくるね」

大きく手を振って、小雪は駆けて行った。門の前には鏡平が待っている。紀咲はその姿を最後



まで見送ることなくドアを閉めた。

小雪は一度だけ、閉じられたドアを振り返った。

「二人とも不器用なんだから」

ぽつりとつぶやくと、前を向いて鏡平に笑いかけた。

一人きり残された家の中。カーテンの隙間から、仲良く並んで歩く二人の姿を見送った。

小雪に、彼氏が出来た。小雪と、鏡平が二人で出かけた。紀咲を置いて。

——二人は、付き合ってるの？

無意識にこぶしを握りしめていたせいで、手のひらが痛い。ただ焦燥ばかりがつのる。

じっとしていることに耐え切れなくなった紀咲は、ふらりと家を出た。

買い物袋を机の上にどさっと置いた。中から取り出したのは、真っ赤な林檎だ。

びりびりと、買って来たばかりの袋の口を開ける。白い粉が、空気中に飛び散った。

がちやりと玄関の鍵が開けられた。ただいまあ、とどこか気の抜けた声。

「あれえ、何かいい匂いがする」

リビングのドアが開き、小雪が顔を出した。後ろに鏡平が続く。

「ほんと。いい匂いだ」

「わーい、林檎のタルトだ」

紀咲は手を拭きながらキッチンから出てきたところだった。

「二人ともお帰り。時間があつたから、作ってみたの」

さっくりとしたタルト生地の上に、薄く切られた

林檎が綺麗に並べられている。ちょうど焼けたばかりで、まだまだ温かい。火傷、してしまいそうなほどに。

「なんか林檎って、白雪姫みたいだね」

小雪の無邪気な笑顔に、紀咲はどきりとした。

冷めるまで待てなかった小雪が、焼きたてのタルトにフォークをつきたてた。

「あ」

「いただきます」

ごくり、と息を呑んだ。胸の前で濡れたままの両手を握りしめる。胸の真ん中が、ぎゅっと痛んだ。

「——やっぱり駄目!!」

叫んで、紀咲はすがりつくように小雪の腕を掴んだ。フォークに乗せられたタルトの欠片が、床に落ちる。

「紀咲？」

「駄目、食べないで！ 食べちゃ、駄目……！」

「どうしたの、紀咲ちゃん」

小雪が、鏡平が、ゆっくりと紀咲を見つめる。二人の目に映った己の姿が恐ろしくて、紀咲はぎゅっと目を瞑った。

「……そ、の、タルトね。小麦粉がたっぷり、入ってるの。だから、食べたら、駄目」

声が、震える。

「どうして？」

どうしてそんな事をしたの。

声に、視線に責められているように紀咲は感じた。それでも、あふれ出たものは止められなかった。

「付き合ってる事、何で隠すの？ 何で、私には何も言ってくれないの？ 姉妹でしょ、幼馴染でしょ？」

言葉と共に涙までが溢れ出した。

「紀咲」

近寄ろうとした小雪を拒絶するように、紀咲は一步後ろにさがった。

「小雪に、彼氏が出来たって。鏡平と、二人で出かけるって。二人が、付き合ってるんじゃないかって考えたら、どうしようも、なく、なって……」

紀咲はその場にずるずると座り込んだ。

はずれものにされた気分で、苦しくて、苦しくて。でも本当だったら怖いから、聞く事が出来なくて。少しくらい苦しめばいいのに、だなんて、何てひどいことを考えてしまったんだろう。下手をすれば、死んでしまったかもしれないのに。

嫉妬に狂ったお妃様。欲しかったのは本当に美しさだったの？

「……ごめんね、紀咲。試すようなまねをして。紀咲が鏡くんの事好きなのは、ずっと知ってたの」

小雪は紀咲の前で膝をついた。

「とにかく、鏡くんと私は、付き合っていないよ。だから、安心して」

「そう、なの？」

「そう。今日はね、鏡くんの買い物に付き合ってただけなの。ねえ、鏡くん」

「きょう、へい……」

鏡平は、こんな浅ましい私を軽蔑していないだろうか。こんなにも、醜い私を。

顔を見るのが怖くて、でももう二度と目を合わせられないのも嫌で。紀咲はすがるように顔を上げた。

「……こんなに紀咲ちゃんが追い詰められているなんて思わなかった、なんて言い訳に過ぎないよね」

鏡平はその場にしゃがみこむと、やや乱暴に前髪をかき上げた。

「……初めは、ちょっとした、意地悪のつもりだったんだ。やきもちを焼いて欲しいだなんて…  
…すごく、後悔してる。ごめん」

見上げた鏡平の眼差しがまっすぐで。紀咲は目がそらせなくなった。

「だったら、あのときの言葉は……」

小雪の方が可愛いと。そう言った彼の言葉にどれほど悩んだらうか。ああそれね、と鏡平は  
苦笑った。

「小雪ちゃんは可愛いよ。でも、俺にとっては妹みたいに可愛いって事で。俺が見てたのは、好  
きなのは、ずっと昔から紀咲ちゃんだよ。きみは、気づいてなかったみたいだけど」

「鏡くん紀咲にそんな事言ったの？」

小雪の眼差しが険しくなる。鏡平は逃げるように 紀咲はその場にずるずると座り込んだ。  
顔をそらした。

「っ、鏡平のばか。嫌い、大嫌い！」

紀咲は鏡平の肩を手の平で叩いた。

他の誰に何を言われても、どうでもよかった。たとえ小雪よりも劣っていると言われても、二  
人が味方なだけで幸せだった。だからこそ、二人に裏切られるのが辛かった。その一言で、どれ  
だけ傷ついたか。

「……ねえ、紀咲ちゃん。昔の約束、覚えている？ あのときの指きりは、まだ有効かな？」

それは本当に幼い頃の約束。将来の仲を誓い合う、なんてありがちな、幼稚なもので。

「……忘れた事なんて、ないわよ」

覚えているのは、自分だけだと思っていた。もう、忘れていると思っていたのに。

「約束よりも戻っちゃうけど、俺の彼女になってくれませんか？」

差し出された鏡平の手を、紀咲はしっかりと掴んだ。鏡平が笑う。紀咲も少し力の抜けたよう  
に笑い、両手で鏡平の手を掴んで手前に引っ張った。

「わ!？」

面白いように転がった鏡平に、紀咲は真っ赤な目で、少しだけ笑った。

「傷ついたから、しばらくは優しくなんてしてあげないから」

「そんなぁ」

鏡平が情けない声をあげる。紀咲と小雪は顔を見合わせて笑った。もう、いつもの空気だ。

「小雪、あんたもよ。私、怒ってるんだから」

紀咲の笑顔に、小雪は頬を引きつらせた。紀咲は笑っているときの方が怖いのだ。

「とりあえず、彼氏が誰なのか教えなさい。私がちゃんとあなたに相応しいか見極めてあげる  
から」

「ええん、だから言いたくなかったんだよお」

小雪は手の平で耳を塞いでぼやいた。

「あと、テスト終わるまで二人ともおやつ抜きね。このタルトも一人で食べるから」

「えー。俺も食べたいなぁ」

「私もー」

二人にむき会くと、紀咲は腰に手を当てた。まだ目は赤いが、もういつもの強気な紀咲に戻っていた。

「駄目。あんたたちの体には良くないんだから、わがまま言わないの」

不満そうな二人の声を背に、タルトをキッチンに引き上げた。

「まあ、テストが終わってからなら、焼いてあげるわ。二人のためだけにね」

背後の歓声に、紀咲はそっと笑った。

嫉妬という名の呪いが解けたお妃様。欲しかったのは、たった一つの言葉でした。